

## 46 宣誓文

これから第4グループの発表を始めます。私たちは関東学院大学の校訓を「人になれ」と「奉仕せよ」に分けて考えました。

はじめに、「人になれ」とはどのような考えや行為が「人になる」のかを考えました。宗教主任の松田先生は、「自分が何者であるのか」を知ることが「人になれ」という言葉を紐解くことになるとお話をくださいました。私たちは看護師になる過程であり、勉強も人生の経験も不足しています。先の生活援助実習では、患者の生活に焦点を当ててケアをしようと考え、清拭や食事の援助をしましたが、技術や計画が不十分でした。また、患者の状態を把握するためにバイタルサインの測定をしましたが、緊張して上手く測定できませんでした。私たちは、患者の優しさや好意に助けられていることに気づき、まだまだ人としても看護師としても発展の途上であることを痛感しました。

人になるとは、自分の弱さを受け入れるところから始まるのだと考えます。例えば、「ケアを行うことで頭がいっぱいになって患者の様子に気づけないことや、患者が本当に望むケアができないこと、指導者や教員に怒られたくない気持ち、患者に話しかけることが怖いと思っていること」など、自分の気持ちに気づき、認めたくない現実を認めて、自分の弱さを受け入れることから始まるのだと考えます。

次に「奉仕せよ」とは何かについて考えました。私たちはマタイの第7章12節にある黄金律、「何事も人々からしてほしいと望むことは人々にもそのようにしなさい」から、この中にある「人々からしてほしいこと」とは何かについて話し合いました。

学生の1人がマザーテレサの例を出しました。マザーテレサは、貧しい人たちや誰からも見捨てられ、路上で死にゆく人々に屋根のある場所を与え、その人々のそばに寄り添いました。このことで多くの人々が救われたそうです。「『人々がしてほしいこと』とは、マザーテレサのした様なことではないだろうか」と、その学生は言いました。私たちは、皆同じように感じていました。では、どうしてただ傍にいただけなのに人々は救われたのでしょうか。「人は1人では弱く寂しい存在であるけれど、ありのままの自分を愛してほしい、存在を認めてほしい」という究極の欲求を持っているからである、と私たちは考えました。マザーテレサはその欲求に応えたのだと思います。

奉仕は英語で **service** です。しかし、私たちは日本語に訳されると自己犠牲と訳される **self-giving** がマザーテレサの行ったことに重なりました。マザーテレサの行為は自分を犠牲にして行ったものではないと考えます。私たちが考える **self-giving** とは、自分が持っている時間や技術を惜しむことなく能動的に行動すること、患者のそばに寄り添い、患者の気持ちや世界観を共有することだと考えます。

これらのことから、私たちが考える奉仕とは、相手に寄り添い、気が付いて欲しいことに気づき、自ら行動することだと考えます。

これから私たちは各看護学実習で様々な患者と出会い、学ばせていただきます。己の弱

さ、足りなさを受け止め、患者思いに気が付き、失敗を恐れず、自ら、進んで患者に近づき、寄り添っていきたいと思います。

以上で第4グループの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。